

小酒井不木

(一)

木沼一慶は、その頃、京師はおろか日本全国にその名の響き渡った名彫刻師であつた。彼は將軍義政公の寵愛を受けたため、芸術家がよく経験する貧乏の味を知らなかったが、その代わり、彼の作品には優美高雅な氣品が備わり、したがって彼の傑作の中には、女人像が多かつた。彼が一世一代の名作として、五ヶ年の歳月を費やして完成した等身大の弁天像は、惜しいかな、後に兵火のために消失したが、この弁天像についてはひとつのエピソードがある。

八坂の開運寺は、今は残っていないけれど、義政公が洛中の人民の幸福を祈るために建立した伽藍であつて、七福神を祀るために、諸国から等身大の七福神像を集めて本堂に安置し、参拝者は土足のまま像に近づいて親しく福運を祈るようになっていた。が、ただ弁天像だけがどこを探してもなかったので、義政公は一慶に命じてそれを彫刻させたのである。

恵比寿、大黒の像をはじめ、他の四神の像は、いずれも前代の巨匠たちの手に成つたものであるから、一慶は何とかして、これらの像にまさるとも劣らぬ像を刻みたいと思つた。ことに七福神中のたった一人の女神である弁天は、いわば万緑叢中紅一点の趣を成すものであつて、弁天像によつて、他の諸神の像が引き立つ訳であるから、彼が義政公の命令を、いかに光榮に思い、かつ、いかに力を注いで彫刻に従事したかが察せられる。

彼には数人の弟子があつた。普通の彫刻ならば彼は弟子に手伝わせるのであるが、弁天像だけは自分の魂を打ち込んでおきたいと思つたので、毛ほども人手を借りず、自分一人で製作に従事した。だから着手してから実に五年の歳月が流れたのである。

いよいよ弁天像のできあがつたとき、一慶は随分疲労してゐた。弟子たちは師の顔色に、まざまざ老衰の色が表れているのを見て暗い氣持ちになつた。その代わり、弁天像は世にも見事な出来栄で、一点の非難の打ちどころもなく、まるで生きているかのように見えたので、恐らく弁天像が師の魂を削り取つたのであらうと、空恐ろしい思いがした。

しかし一慶は弟子たちが、いかに口を極めて稱賛しても、ちつとも嬉しくはなく、かえつて何となく寂しい思いがした。というのは、昨年勘当した弟子の俊慶の、弁天像に対する批評を聞き得なかつたからである。

(二)

俊慶というのは、四年前に弟子入りをした当時二十歳の青年であった。彼はその技量の点においては往々一慶を凌いだくらしい天才であったが、素行がおさまらなかったもので、一慶は涙を吞んで勘当したのである。今、弁天像ができたが、一慶は、俊慶にひとめ見せてその批評を乞いたかったのであった。例えば世の中のあらゆる人が、口を極めて賞賛しても一慶は満足できず、反対に、世の中のすべての人が、口を揃えて非難しても、ただ俊慶一人が賞賛してくれたら、それが満足であると思った。それほど一慶は、俊慶の天才に、いわば一目置いていたのである。だから一慶は、内心では俊慶を呼び寄せて、像を見せたいのであったが、他の弟子の手前、そういうこともできず、すこぶる物足りない思いをしながら、遂に弁天像を開運寺に運んだのである。

いよいよ弁天像開帳の日が定まるや、洛中はその噂で持ちきった。第一日は義政公がおなりのなつて盛大な儀式が挙げられ、翌日から一般民衆に参拝を許されることになった。そして義政公が、この像に十二分の満足を示されたことは言うまでもない。

一慶は、心のうちで、俊慶がきつと弁天像を見に来るに違いないと思った。もし見に来たならば、何か、しかるべき批評の言葉を漏らすに違いないと思った。で、彼は開帳式の翌日、人目につかぬ堂内のうす暗い一隅に立って、俊慶が来るのを待ちかまえた。

早朝から潮のように押し寄せた老若男女は、異口同音に弁天像を激賞した。そして入れ替わり立ち替わり入ってくる人々で、さすがに広い堂内も身動きできぬほど埋まったが、だんだん春の日が西に傾いて、堂内全体がうす暗くなった頃には、参拝者は一人減り二人減って、遂には数人の人々が、熱心に、いわば鑑賞的に弁天像を仰いでいるばかりであった。

一慶は、俊慶が群集の出さかる頃に見に来るとは思わなかった。で、夕方になったら、あるいは飄然としてやって来るかも知れぬと期待していたのであるが、彼の姿は一向に現れなかった。もつとも近頃は俊慶の方からばったり消息を絶っていたから、あるいは彼は京師に居ないのかも知れぬとは思ったが、かといって内心の寂しさをいかにともすることができなかった。

やがて、開運寺の僧侶たちが、ぼつぼつ閉堂の用心をしかけたので、一慶はがっかりして、自分も帰宅の用意を始めながら、ふと弁天像の方に眼をやると、思わずはッとして身をすくめた。

弁天像を熱心に見上げながら、そこに、俊慶が立っていたからである。

一慶の胸は躍った。俊慶の眼に、彼の生涯の傑作がいか映るかと思うと、一種の興奮を覚えざるを得なかった。で、彼は、俊慶に気づかれぬようにできるだけ、そのそばに近づいて、俊慶の顔色をうかがった。

そうとは知らず俊慶はわき目もふらず弁天像に眺め入った。彼は後ろに廻り前に廻り、幾度か同じ動作を繰り返したが、その間一言も発しないばかりか、あたりには少しの注意も払わなかった。もうその頃に広い堂内の土間に居るのは、俊慶と一慶の二人だけであった。

やがて、俊慶は弁天像の前に立ち止まって、ほつとため息をついた。見ると、その顔には微笑が浮かんだ。

賞賛か、軽蔑か、暗いのでそのいずれの笑いであるかわからなかったが、その時俊慶の呟いた次の言葉は、まさに一慶を気絶させようとした。

「惜しいことに、たった一つ欠点がある！」

(三)

このことがあってから、一慶は満ち足りぬ日々を暮らした。弁天像の評判がますます良くなるに連れ、かえって不愉快が募った。彼はどう考えて見ても、弁天像に欠点があるとは思えなかった。たとえ欠点があるとしても、どこにあるのか気づかなかった。それだけに、いよいよ俊慶の言葉が気にかかった。

あの時、一慶が軽い失神から意識を回復した時には、もう俊慶の姿は見えなかった。だから、欠点は何であるかを聞くことができなかったが、今になっては尚更、彼を呼び寄せて聞く気にはなれなかった。

とかくする内、青葉の頃が来て、一慶は重い病の床についた。弁天像を刻み上げたための疲労のほかに、俊慶の言葉が病勢を悪化させたのは事実であった。

いよいよ病が進んだ時、彼は弟子の一人に俊慶を呼びにやった。死期が間もないことを知った彼は、息のあるうちに「欠点」を聞いておきたいと思ったからである。

俊慶は取るものも取りあえず師の枕もとに駆けつけた。元来、他の弟子への見せしめに勘当したのに過ぎぬから、一慶と俊慶は顔を見合わすなり、相互の心に温かい師弟の情が流れた。俊慶はその場で勘当を許された。

「お前、あの弁天像を見て、たった一つ欠点があると言ったが、欠点とは何のことか」しばらくして、一慶は声を震わせながら、こう尋ねた。すると、俊慶は涙を払って身を正した。

「お師匠様はあの場においでになりましたか」

「居たよ、お前の批評の言葉が聞きたかったのだ。だが、あれからわしは苦しんだよ。どうしてもその欠点がわからないから」

「もったいない！」と、俊慶は思わずうつ伏した。

「どうぞ勘弁して下さいませ。私が欠点と申しましたのは………」

「うむ、欠点とは？」

「あの生きたまんまの像が、物を言わぬのは欠点だと言ったのでございます」

返事がないので、はツと思つて俊慶が顔を上げると、一慶の顔には満足の微笑が漂っていたが、それきり一慶も、永久に物を言わなかった。